灰谷健次郎『少女の器』における「自立」を促す要因と「器」の形成

小島　草子
（文20－154　国語国文学専修　国文学コース　4年）

【目次】

１、はじめに～児童文学『少女の器』とは～
２、研究の背景（先行研究）
３、研究の概要
４、家族との関わり
５、上野、夏子との関わり
６、「器」の形成
７、おわりに

1、はじめに～児童文学『少女の器』とは～

・1989年に新潮社から発表された灰谷健次郎による**児童文学作品。**
主人公の少女、絣（かすり）の15歳～17歳までの成長を描く。
「小説新潮」にて1985年～1989年まで短篇として連載され、後に短篇のタイトルが章題となり、「少女の器」として長編小説化した。1992年には文庫化もされている。その後、灰谷が版権を新潮社から引き上げたので、1999年に角川書店から再度文庫化されている。

★「小説新潮」に掲載された時のタイトル
・第一章：少女の器
・第二章：少女の向こう
・第三章：少女の本
・第四章：少女の一日
・第五章：少女の場所

2、研究の背景（先行研究）

黒古一夫　**主人公絣の自立に注目した研究**

『教育』や『子育て』において課題の一つとなっている子どもの『自立』について、それは放っておいても自分で『自立』への道を歩むであろう絣のように恵まれた環境にある子どもにとっての問題ではなく、経済的にも社会的にも苦境にある下層の人々と子どもたちにとってより切実である。

西村与志木　**「器」に注目した研究**

『少女の器』とはある感受性のキャパシティのことを指すのではないかと思う。大人になることが成熟であるとすれば未熟であることを失っていくプロセスであるともいえるだろう。未熟であるがゆえの鋭さ、そして豊かさ、そんな感受性を少女は持っている。

3、研究の概要

研究目的

◎主人公、絣の「自立」がどのように促されているかを、絣の「家族」及び「他者」との関わりから分析する。また、「器」の持つ意味を明らかにすることで作品における「自立」とは何かを考察する。

研究手法

◎絣の「家族」と「他者」との関わりから絣に芽生えたものは何かを分析し、そこからタイトルにもある「器」の意味を明らかにすることで、絣の「自立」を促した要因を考察する。

★絣は本当に「自立」しやすかったのか？器＝未熟な感受性のキャパシティなのか？（先行研究より）

4、家族との関わり

◎絆の家族→母、父、絆（両親は離婚している）

・絆は母との二人暮らし→「反抗期」、「思春期」と言って子どものことを考えない「怠け者」と母親を批評する。

・父親には心を開いているが、父の新しい恋人との関係には少し動揺している。

◎同年代の家族→上野（不良）と母（アルコール依存症）
→夏子（自殺未遂を繰り返す）と両親

◎新しい家族→母の恋人、父の恋人→やがて別れる

「家族の比較」→自分の「家族」と自分以外の「家族」と関わったことで、絆の中に新しい考えが芽生える。

→「他者理解」、「家族形成の複雑さ」

5、上野、夏子との関わり

◎上野→不良少年。親を「敵」と言いながらもアルコール依存症の母親の入院する病院に通う優しさを持つ。
上野の台詞:「親子はどこまでいっても戦争やなあ」

◎夏子→自殺未遂を繰り返す少女。家庭に居場所が無いと感じている。上野、絣、絣の家族、保育園の人々との交流によって、徐々に心の安定を取り戻す。
夏子の台詞:「私はもう死ぬのはやめます。誓います」

絣の変化

同じ年齢でありながら自分とは違う境遇の二人に出会ったことで、相手を理解することの重要性や寄り添うことの大切さを感じるようになる。→「他者理解」の精神が芽生える！

6、「器」の形成

◎仮説:「器」＝「心」

・「少女の器」とは少女の「心」を表していると考えており、未熟でありながらも、他者を理解し、複雑な「家族」を必死に形成しようともがく少女の姿を投影していると考える。

・「心」:人間性、価値観、愛情観、自己認識

すなわち、「器」の形成＝「心」の形成＝「自立」

↓

多感で思春期を迎えた少女の「自立」は「家族」や「他者」との関わりによって促され、「心」という「器」の形成に繋がっている。

7、おわりに

絆の『自立』

・絆は決して「自立」しやすい環境に元々居たのではなく、「家族」の比較、「他者」理解から自身の考えや価値観を育んだことで、「自立」が促されたのである。

『器』の持つ意味

・「器」＝未熟さを失う子どもの感受性ではなく、人間性、価値観、自己認識、愛情観など形成されていく「心」を表しており、未熟さも含めて少女の「心」＝少女の「器」である。